「怡土城」築城における人間模様
―藤原仲麻呂と吉備真備・佐伯今毛人―

瓜生　秀文（糸島市教育委員会文化課）

1．はじめに

「怡土城」は（註１・図１）、８世紀半ば、福岡県糸島市高来寺・大門・高祖に所在する高祖山(標高416m)の西斜面に築かれた古代山城である。

当時、日本と新羅間の国際関係が悪化して新羅征討の気運高まる中で、大宰府防衛の西の拠点として築城されたものと考えられている。東は山頂の稜線、北は尾根、南は谷、西は山裾を境としており、全周6.5km、城内面積は約290haに及ぶ。

現在でも北辺に５ケ所、南辺に２ケ所の望楼跡・礎石群のほか、西に２ケ所の礎石が残っている。特に全長約２kmに及ぶ土塁は残存状況に恵まれ、往時の城域の構造がよくわかる。

怡土城の築城期間・担当者・経過などについては『続日本紀』に記録されており、その築城担当者として、「吉備真備」・「佐伯今毛人」の２人が確認できる（註２）。小稿では怡土城の築城を指揮した２人と当時政権の中枢にいた「藤原仲麻呂」（註３）との関係を通じて、怡土城築城の影に見え隠れする人間模様（註４）について若干ではあるが考察することにする。

2．藤原仲麻呂と吉備真備（図２）

最初に怡土城の築城を指揮した吉備真備（註５）は持統天皇９年（695）、下級官吏下道朝臣圀勝の子として生まれ、宝亀６年（775）10月２日に薨じた。享年83歳（薨伝では81歳）。極官は右大臣であった。

吉備真備は僧玄昉とともに橘諸兄（註６）政権のブレーンであった。ところが、橘諸兄政権の弱体化とともに藤原仲麻呂が頭角をあらわし、まず、僧玄昉を造観世音寺長官として筑紫（九州）に左遷する。結果として、天平18年（746）、僧玄昉は観世音寺の落成式の際、藤原広嗣の亡霊(支持者)に暗殺される。（註７）

次に藤原仲麻呂は吉備真備も筑紫に遠ざけ、筑前守、そして俄かに肥前守へと左遷する（註８）。当時、筑紫（九州）のなかでも特に肥前地方において反政府的動向が見られたようだ（註９）、その一例として、天平12年（740）、乱を起こし「大宰少弐」から謀反人となった「藤原広嗣」を値嘉嶋の人々（肥前国の海人）は済州島の近くまで逃亡するのを加勢している。さらに、刑死後には「弥勒知識寺」をも建立し、その死を弔っている（註10）。こうしたことから、僧玄昉の暗殺は筑紫における藤原広嗣の支持者によるものと考えられている。藤原仲麻呂はこれらのことをふまえ、吉備真備も僧玄昉と同じ運命にあわせようと考えたのであろう。

しかし、吉備真備はその危機をうまくかわす。さらに、藤原仲麻呂は吉備真備を遠ざけるため、天平勝宝３年（751）、遣唐副使として唐へ派遣する（註11）。当時の遣唐使は南島路もしくは南路による渡海であったため難破・遭難率が高かった。吉備真備も帰路で漂流はするものの、帰国を果たす。

思惑がはずれた藤原仲麻呂は天平勝宝６年（754）、吉備真備を「大宰大弐」に昇格させ、さらに怡土城築城の専当官に任命する（註12）。これは吉備真備の軍事方面の才能を活用しつつ、吉備真備を大宰府に釘付けにする巧みな人事（政略）であった。大宰府の10年間、吉備真備は藤原仲麻呂の巧みな政略に屈することになる。

3．藤原仲麻呂と佐伯今毛人（図３）

吉備真備と中途交代し怡土城の築城を指揮した佐伯今毛人（註13）は養老３年（719）に佐伯人足の子として生まれ、延暦９年（790）10月、薨去した。享年72歳であった。造東大寺長官・造西大寺長官などを歴任し、「東大寺居士」とも称せられた。また大宰府の長官に何度も任命され、極官は民部卿であった。

光明皇后が政治の実権を掌握すると、藤原仲麻呂の権力は急激に増大する。藤原仲麻呂の昇進と強大な権勢は、中央貴族の間に追従する一派と反

感を抱く一派とを生じせしめた。天平勝宝四年ごろからこのような政治的対立はさらに激化することになる。しかし、佐伯今毛人に関しては、その実直な人柄からいっても、この険悪な気流には巻き込まれずひたすら東大寺の造営に励んでいた。藤原仲麻呂と佐伯今毛人との関係は東大寺造営を介して天平勝宝８歳（756）ごろまではむしろ円滑であったと考えられている。

その藤原仲麻呂と佐伯今毛人との関係を一転させる大事件が起こる。それが天平宝字７年（763）３月の「藤原良嗣の変」（註14）であった。

天平宝字元年（757）ごろからの藤原仲麻呂の政策は新奇をてらい、私欲に出たものが多く、良識者の眉をひそめさせるものばかりであった。『続日本紀』によると、藤原宿奈麻呂(後に良嗣と改名)が中心となり、佐伯今毛人・大伴家持・石上宅嗣をさそい、彼らの間で藤原仲麻呂を暗殺する蜜謀が議された。ところが、この蜜謀は外に漏れ、右大舎人の弓削男広が藤原仲麻呂に密告した。それを受けて、藤原仲麻呂はただちに彼ら四人を捕縛し、糾問させた。佐伯今毛人・大伴家持・石上宅嗣は、あくまでも蜜謀を否認したが、藤原宿奈麻呂は「宿奈麻呂ひとり謀首たり、他人はかつて預かり知らず」と明言し、３人をかばった。そこで藤原仲麻呂は藤原宿奈麻呂の姓と位階を奪い、蟄居させる。

藤原宿奈麻呂の毅然とした態度によって、佐伯今毛人・大伴家持・石上宅嗣の３人は、危うく虎口を逃れ、無事釈放されたものの、左遷の憂き目は免れなかった。天平宝字８年（764）正月、大伴家持は「薩摩守」、石上宅嗣は「大宰少弐」、そして佐伯今毛人は「営城監」に任ぜられ筑紫（九州）に追放される。（註15）

ただし、藤原仲麻呂は３人を野放しにしたのではなく、腹心の佐伯毛人を「大宰大弐」に補し、彼ら３人と大宰員外帥（前右大臣）藤原豊成とを監視させたのであった。なかでも、佐伯今毛人に関しては天平宝字８年８月には「肥前守」を兼ねさせる（註16）。これはかって吉備真備に対して実施した人事と同じであり、藤原仲麻呂は佐伯今毛人が筑紫で暗殺されることを望んでいたのかもしれない。

しかし、この正月の異動で藤原仲麻呂はかつて橘諸兄政権におけるブレーンの一人であり、彼が最も恐れていた吉備真備を「造東大寺長官」に任じて入京させてしまう。このことは藤原仲麻呂派にとって大きな禍因となった。

天平宝字８年９月11日、ついに藤原仲麻呂政権にも運命の日が来る。藤原蔵下麻呂が討賊将軍に、吉備真備が軍師として起用され、彼の作戦によって藤原仲麻呂追討戦が開始される。やがて、藤原仲麻呂は鬼江の砂洲で悲惨な最期を遂げ、藤原仲麻呂政権は崩壊してしまう。

４．築城秘話―吉備真備・佐伯今毛人と西海道出身防人―

「怡土城」の築城を開始した３年後の天平宝字３年（759）３月、吉備真備は大宰府防衛の不安４ケ条を中央政府に奏上する（註17）。その中で第２条と第３条は「防人」に関するものであった。

第２条は天平宝字元年（757）８月27日の勅に基づく「東国防人」の廃止による防衛上の不安を訴え、さらに「東国防人」の復活を望んでいる。第３条は天平宝字元年に廃止された「東国防人」の代わりに新しく差し遣わされた西海道（九州）出身の兵士で編成された「防人」を「怡土城」の築城に従事させたいという内容であった。特に、第３条は当時の防人の規定になかったために大宰府の官人達の反対を押し切ってまでもあえて奏上している（註18）。

そもそも「防人」は大化の改新の詔にその記述を確認できるが、実際に制度化され充実していくのは天智３年（664）の白村江の敗戦後と考えられている（註19）。はじめは諸国から出されたようであるが、天平２年（730）をさかいに東国出身の兵に切替えている。その後、運営が困難となったため、次第に筑紫（九州）の兵に代えられているが、東国出身の兵に固執する傾向にあった。

この理由の一つとして、東国の地は早くから大和政権に掌握され、その軍事的・経済的基盤となっていた。それに対して筑紫（九州）の豪族は「筑紫君磐井」に代表されるように反公権力的エネルギーを強く温存する特徴があって、東国の中央権力へ従属度に比べると大きな差があった。筑紫へ左遷された吉備真備も天平12年（740）に乱を起こした藤原広嗣を支持し、刑死後も彼のため

に「知識寺」を建立する筑紫の豪族の反公権力的な特質を筑前守、特に肥前守のときに体験したのであろう。そのために吉備真備は西海道出身の兵士で編成された「防人」を最前線に配置しないであえて「怡土城」の築城に従事させ、その一方で「東国防人」の復活を熱望したと理解できる。

「怡土城」築城を吉備真備と中途交代した佐伯今毛人も「防人」については東国防人の兵に固執する傾向にあり、天平神護２年（766）４月に太政官に進言し、さきに廃止された東国出身の防人の復活を請い、勅許を得ている。この進言の理由として佐伯今毛人も吉備真備と同じように「肥前守」の際、筑紫（九州）の反公権力的エネルギーを強く温存する特質を体験したためであろう。そして、天平神護２年４月、佐伯今毛人より進言された東国出身の防人の復活を時の中央政府の右大臣として許可したのが、最初に「怡土城」の築城を専当した吉備真備であった。

５．吉備真備と佐伯今毛人（図４）

吉備真備と佐伯今毛人との関係を直接示す史料の存在は現時点において確認されていない。しかし、吉備真備に比べると、佐伯今毛人に関する史料のほうが比較的良好に揃っているため、ここでは佐伯今毛人に関する史料を基に両者の関係について考察したい。

まず、佐伯今毛人の父親である佐伯人足と吉備真備とに接点が認められる。佐伯人足は右衛士督従五位下を極官として政界を引退したのであるが、その後任として就任するのが吉備真備であった。吉備真備は天平７年（735）、唐より帰国し、大学助（正六位下）から中宮亮（従五位上）へと昇格し、そして天平10年（738）には右衛士督の任にあった。これから推測すると、佐伯人足は天平９年（737）まで右衛士督であったのか、あるいは天平９年の疫病(天然痘など)によって卒去したのかのいずれかであったであろう。ここで佐伯今毛人を人足の30歳の時の子と仮定し、そして人足が天平９年の疫病（天然痘など）によって卒去したとすると、人足は48歳で卒したことになる。佐伯人足の嫡子である佐伯今毛人は20歳を前にして父人足の死に遭ったと考えられる。

佐伯今毛人には佐伯真守という兄がいた。この佐伯真守もなかなかの人物であり、後には大蔵卿（正四位上）まで昇進している。天平宝字７年（763）３月に起こる「藤原良継の変」で佐伯今毛人は筑紫（九州）に左遷されるのであるが、翌天平宝字８年（764）、兄の佐伯真守は正六位上で都にいた。おそらく佐伯真守は、父である佐伯人足と同じコースをとって衛府の武官であったと考えられている。その佐伯真守が天平宝字８年に「造東大寺司」の判官に転じるのである。時の「造東大寺長官」は大宰府から帰京した吉備真備。この異動の背後には、吉備真備の運動があったと考えられる。佐伯真守は吉備真備の秘書官のような仕事も担当していたのであろう。そして、吉備真備は「造東大寺長官」が管理する「正倉院」は類のない宝庫であるのと同時に、重要な兵庫（兵器倉庫）であることも知悉していた。造東大寺司の次官の国中連公麻呂は時勢には超然としていたため、佐伯真守は判官の美努連奥麻呂と気脈を通じ、他日を期していたと考えられる。そしてついに藤原仲麻呂政権にも、運命の日がくる。それは天平宝字８年９月11日のことであった。吉備真備が軍師として起用され、彼の作戦によって藤原仲麻呂派への追討戦が開始される。軍兵の動員と同時に、吉備真備は太上天皇の命令として法師安寛を正倉院に派遣し、佐伯真守と美努連奥麻呂の両判官立合いのもとに、大刀88振・弓103張・甲冑100領・矢筒96具などを取り出しており、その武具を造東大寺司に働いていた工匠や役夫に着装させたと考えられている。その追討軍の中には佐伯今毛人の息子である佐伯三野が含まれ、父親の無念を晴らすべく奮戦した。佐伯三野らの奮戦の結果、藤原仲麻呂派は敗北し、藤原仲麻呂本人は鬼江の砂洲で悲惨な最期をとげた。

藤原仲麻呂の乱後、息子の佐伯三野、兄の佐伯真守は乱を鎮圧した功績により、それぞれ従五位上、従五位下を授けられる（註20）。大宰府にあって佐伯今毛人はわが子と兄の昇進を心からよろこんだことであろう。その佐伯今毛人本人であるが、大宰府に在職中もっぱら力をそそいだのが築城や軍士の配置であった。すでに新羅征討計画は藤原仲麻呂政権崩壊と供に立ち消えになってはいたものの、大宰府としては新羅に対して防備を充分にしておく必要があった。その一環として佐伯今毛人は天平神護２年（766）４月に太政官に進言し、さきに廃止された東国出身の防人の復活

を請う。結果として、勅許を得ることになるが、その背後には時の中央政府の右大臣であり、最初に「怡土城」築城を専当した吉備真備の姿があった。

以上、吉備真備と佐伯今毛人との関係を直接説明する史料は確認できないが、佐伯今毛人の父親の佐伯人足、兄の佐伯真守、そして息子の佐伯三野をも通じて、吉備真備と佐伯今毛人の両者は何らかの接点を持っていたと考える。推測の域を出ないが、特に、藤原仲麻呂の乱前後において、事を成就させるため都と大宰府との情報交換は吉備真備と佐伯今毛人のみならず、佐伯真守・佐伯三野をも巻き込んで慎重かつ綿密に行われていたのではなかろうか。今後さらなる史料の蓄積を待ってこのテーマについては再度考察したいと思う。

6．おわりに

以上、「怡土城」築城を指揮した吉備真備・佐伯今毛人と当時政権を掌握していた藤原仲麻呂との関係について考察したが、史料の制約もあり不明な点が多く、十分な考察ができたとは言い難い。（図５）

しかし、金武青木遺跡から「怡土城」に関する木簡が出土するなど（註21）、若干ではあるが史料が増加している状況である。今後の調査・研究により新たな史料が発見・紹介されると考えられるため、さらなる史料の蓄積を待って、別の機会で考察したいと思う。

なお、本文でも紹介したが、吉備真備・佐伯今毛人の両者は共に左遷され、左遷先として肥前地方があった。古代史において日本と朝鮮半島との関係が悪化した際、肥前地方（海岸部）の海人は朝鮮半島側に内応するという反政府的な動きをとったようである（註22）。この古代史における肥前地方の反政府的行動についても別稿にて考察したいと思う。

【註】

1．鏡山猛「怡土城趾の調査」（『日本古代文化研究所報告』　第６・1937年）
　瓜生秀文編「国指定史跡　怡土城跡」（前原市文化財調査報告書・第九四集・2006年）
　なお、文献史料としては『続日本紀』天平勝宝８歳６月22日条及び『続日本紀』神護景雲２年２月28日条等がある。

2．「怡土城」と「吉備真備」との関連を示す史料は『続日本紀』天平勝宝８歳６月22日条、「怡土城」と「佐伯今毛人」との関連を示す史料は『続日本紀』天平宝字８年正月21日条を参照。

3．岸俊男『人物叢書　藤原仲麻呂』（吉川弘文館・1987年）

4．瓜生秀文「怡土城について―怡土城築城における人間模様―」（髙倉洋彰編『東アジア古文化論攷』中国書店・　2014年）

5．宮田俊彦『人物叢書　吉備真備』（吉川弘文館・1988年）

6．中村順昭『人物叢書　橘　諸兄』（吉川弘文館・2019年）

7．『続日本紀』天平18年６月18日条

8．『続日本紀』天平勝宝元年正月十日条及び『続日本紀』　宝亀６年10月２日条

9．長　洋一「天平宝字５年の肥前国」（『西南学院大学国際文化論集』116・1986年）
　瓜生秀文「怡土城に関する諸問題―怡土城築城担当者と「肥前守」について―」（『大宰府の研究』・大宰府史跡発掘50周年記念論集・高志書院・2018年）

10．長　洋一「藤原広嗣の怨霊　覚書」（『歴史評論』417・1987年）

11．『続日本紀』天平勝宝３年11月７日条　　藤原清河（従四位下）を大使、大伴古麻呂（従五位下）を副使、それに吉備真備（従四位上）が副使として任命される。この遣唐使は副使が二人であって異例である上に、大使の藤原清河より副使の吉備真備の位階が上であった。この派遣の背後には、時の権力者「藤原仲麻呂」の政治的意図が見え隠れする。

12．『続日本紀』天平勝宝8歳6月22日条　　『続日本紀』によると、吉備真備は「専当官」となっている。この「専当官」は正式の官職名ではなく、吉備真備はあくまでも大宰府官人の一人として怡土城築城の担当を命じられていると考えられる。

13．角田文衛『人物叢書　佐伯今毛人』(吉川弘文館・1988年)

14．『続日本紀』宝亀８年９月18日条

15．続日本紀』によると、吉備真備は「専当官」、佐伯今毛人は「専知官」となっている。この「専当官」は正式の官職名ではなく、吉備真備はあくまでも大宰府官人の一人として怡土城築城の担当を命じられていたことを示していると考えられる。一方、「専知官」は正式の官職名と考えられ、佐伯今毛人は怡土城築城の為の官司機構の長官であったことを想定される。このことから、怡土城築城当初から完成にいたるまで次第に怡土城築城に関する大宰府の官司機構が整備されていったことも同時に示唆していると考えられる。

16．『続日本紀』天平宝字８年８月４日条

17．『続日本紀』天平宝字３年３月24日条

18．吉備真備が奏上した案件（第３条）を藤原仲麻呂は許可している。この背景には東北地方で鎮兵などを築城に従事させたということがあったかもしれないが、一つの考え方として藤原仲麻呂の吉備真備に対する警戒心が次第に薄らいでいったと考えることができる。

19．『日本書紀』天智天皇３年是歳条

20．『続日本紀』天平宝字８年９月12日条及び『続日本紀』天平宝字８年８月10月７日条を参照。

21．加藤隆也編「金武青木―金武青木Ａ遺跡第一次調査・金武青木Ｂ遺跡第一・二次調査―」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1146集・2012年）

22．長　洋一「天平宝字５年の肥前国」(『西南学院大学国際文化論集』116・

1986年)
瓜生秀文「怡土城に関する諸問題―怡土城築城担当者と「肥前守」について―」(『大宰府の研究』・大宰府史跡発掘50　周年記念論集・高志書院・2018年)

【参考文献】

『続日本紀』(新日本古典文学大系・岩波書店・2000年)
野村忠夫『古代官僚の世界―その構造と勤務評定・昇進―』(塙新書第28・塙書房・1969年)
長　洋一「藤原広嗣の怨霊　覚書」(『歴史評論』417・1985年)
長　洋一「天平宝字五年の肥前国」(『西南学院大学国際文化論集』116・1986年)
鏡山　猛「怡土城趾の調査」(『日本古代文化研究所報告』第6・1937年)
瓜生秀文編「国指定史跡　怡土城跡」(前原市文化財調査報告書・第94集・2006年)
岸　俊男『人物叢書　藤原仲麻呂』(吉川弘文館・1987年)
宮田俊彦『人物叢書　吉備真備』(吉川弘文館・1988年)
中村順昭『人物叢書　橘　諸兄』(吉川弘文館・2019年)
角田文衛『人物叢書　佐伯今毛人』(吉川弘文館・1988年)
加藤隆也編「金武青木―金武青木A遺跡第一次調査・金武青木B遺跡第一・二次調査―」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1146集・2012年)
瓜生秀文「怡土城について―怡土城築城における人間模様―」(高倉洋彰編『東アジア古文化論攷』中国書店・2014年)
瓜生秀文「怡土城と吉備真備・佐伯今毛人」(『西日本文化』第471号・西日本協会・2014年)
瓜生秀文「怡土城に関する諸問題―怡土城築城担当者と「肥前守」について―」(『大宰府の研究』・大宰府史跡発掘50周年記念論集・高志書院・2018年)

【図版出典】

図1　怡土城遺構図(『国指定史跡　怡土城跡』(前原市文化財調査報告書・第94集・2006年)に筆者一部加筆)
図2　吉備真備と藤原仲麻呂(著者作成)
図3　佐伯今毛人と藤原仲麻呂(著者作成)
図4　吉備真備と佐伯今毛人(著者作成)
図5　藤原仲麻呂と吉備真備・佐伯今毛人(著者作成)

【特記】

この小稿は「怡土城と吉備真備・佐伯今毛人」(『西日本文化』第471号・西日本協会・2014年)に一部史料を追加し、訂正を加えたものである。

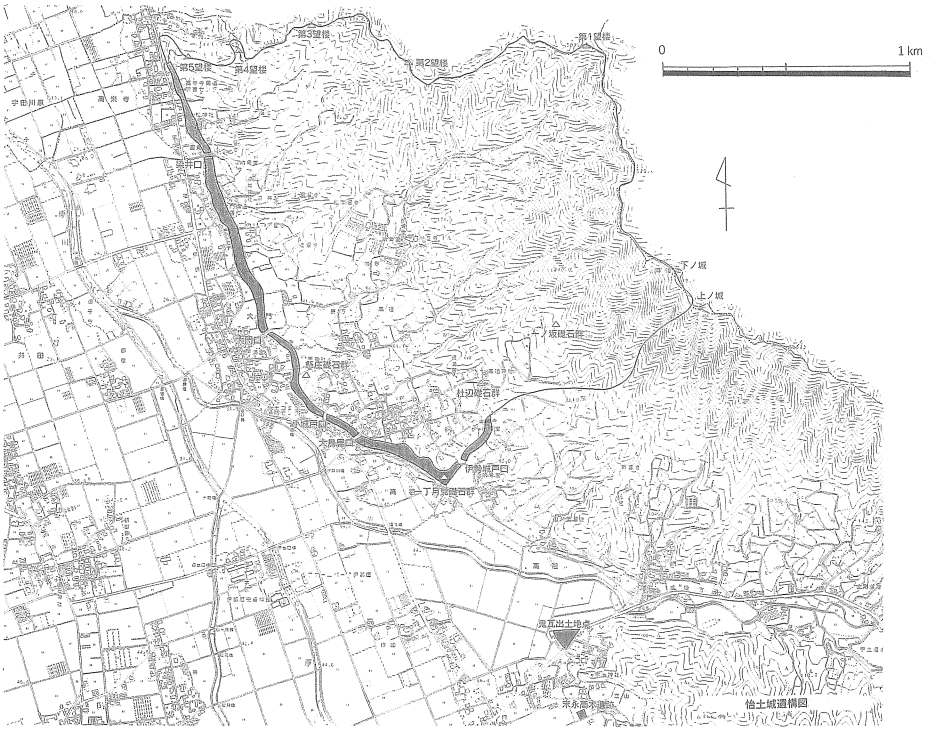

図1　怡土城遺構図

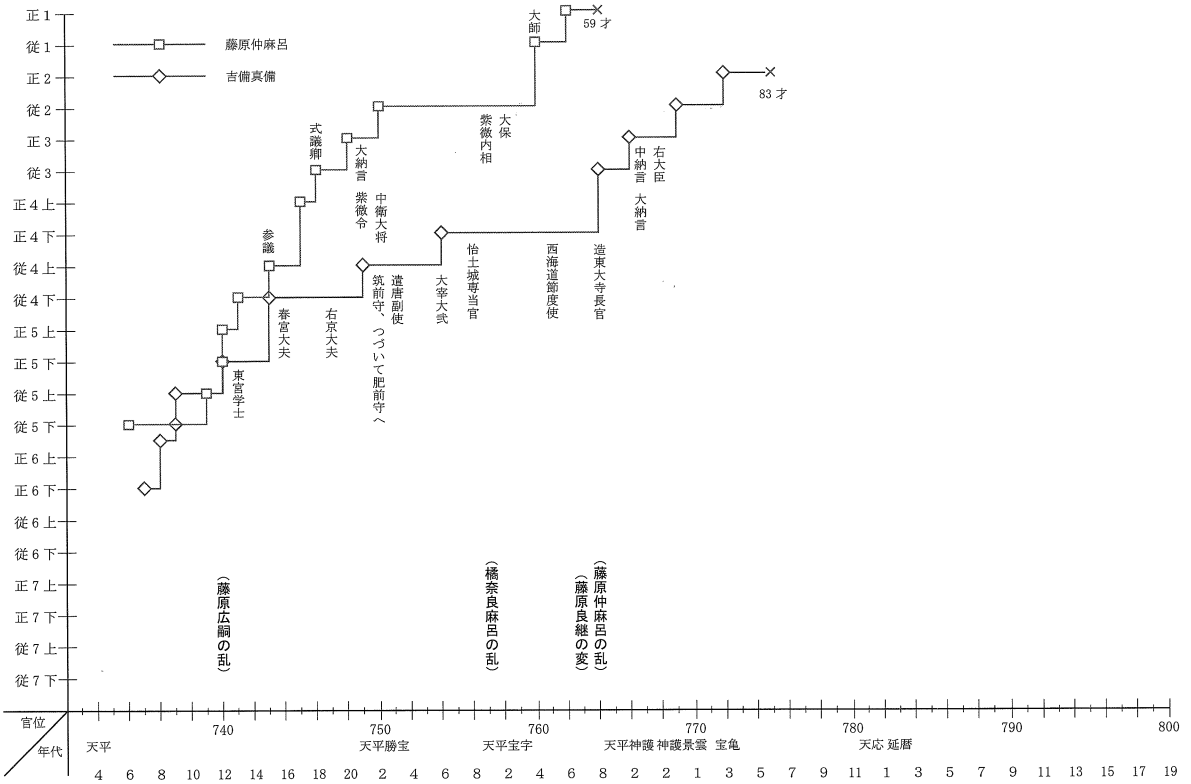

図２　吉備真備と藤原仲麻呂

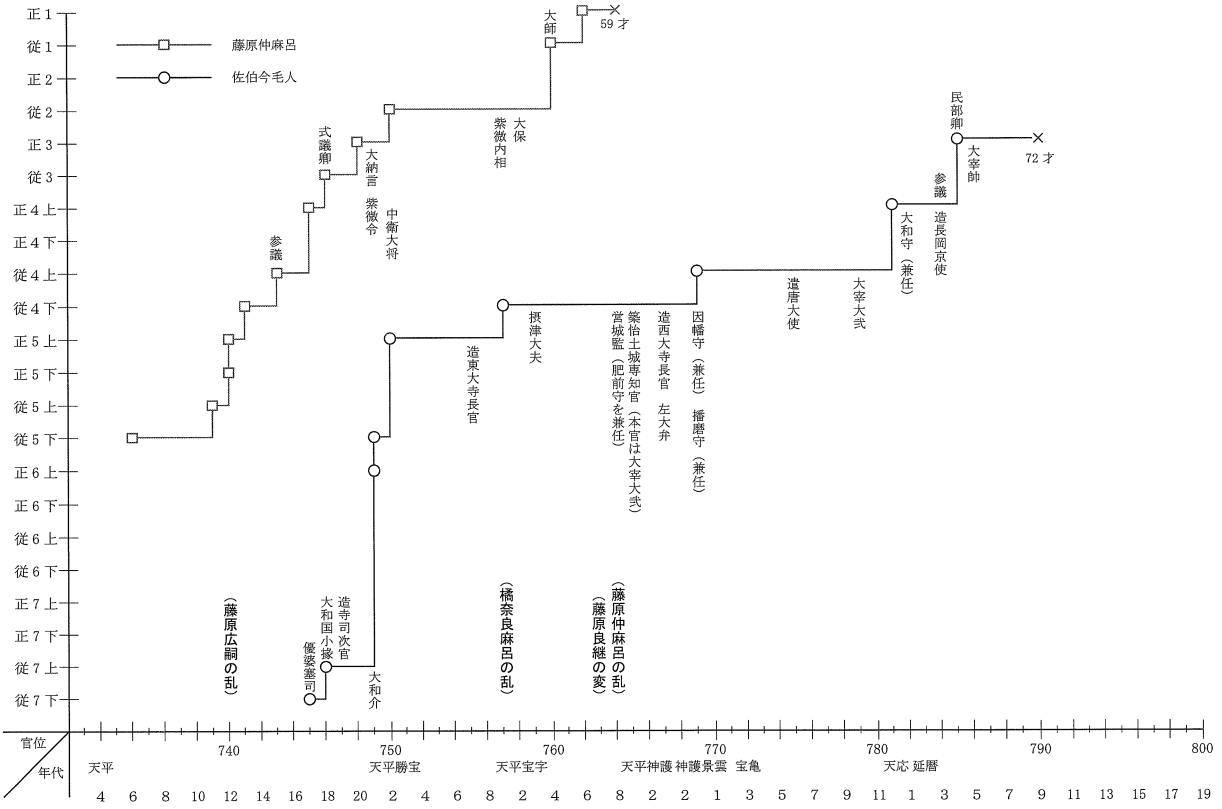

図３　佐伯今毛人と藤原仲麻呂

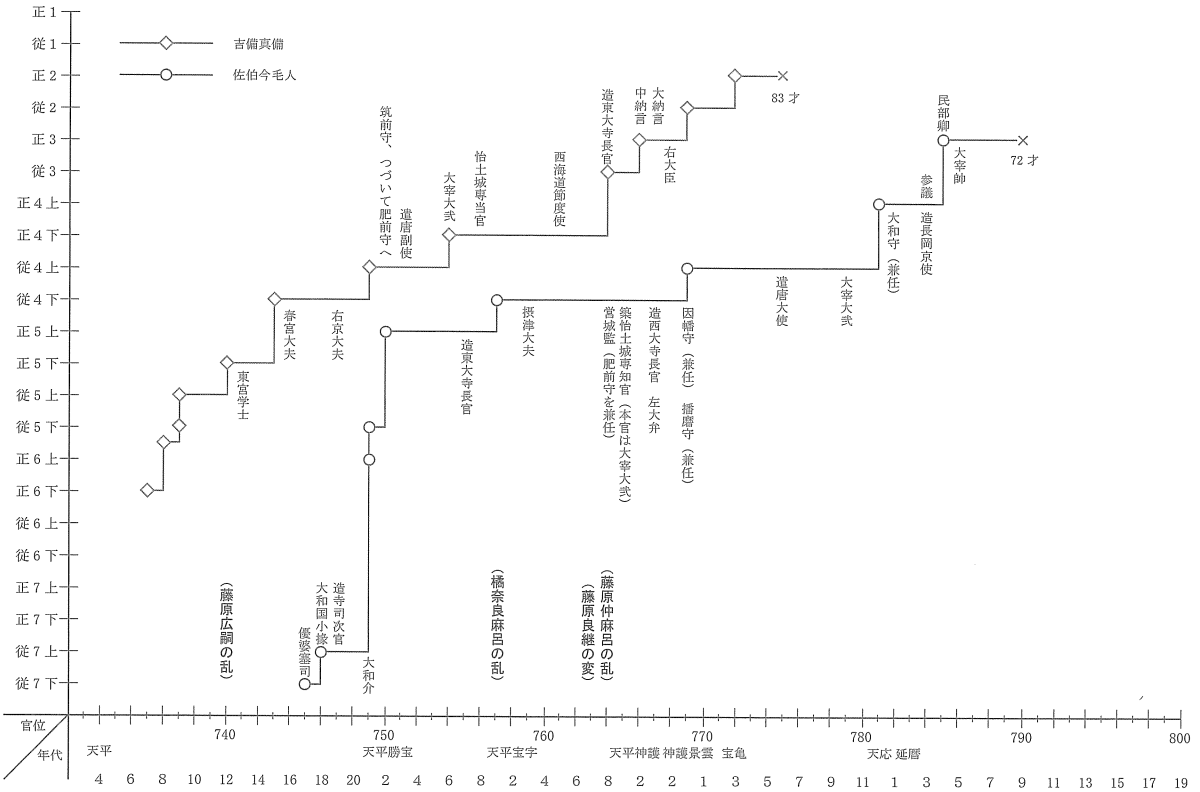

図４　吉備真備と佐伯今毛人

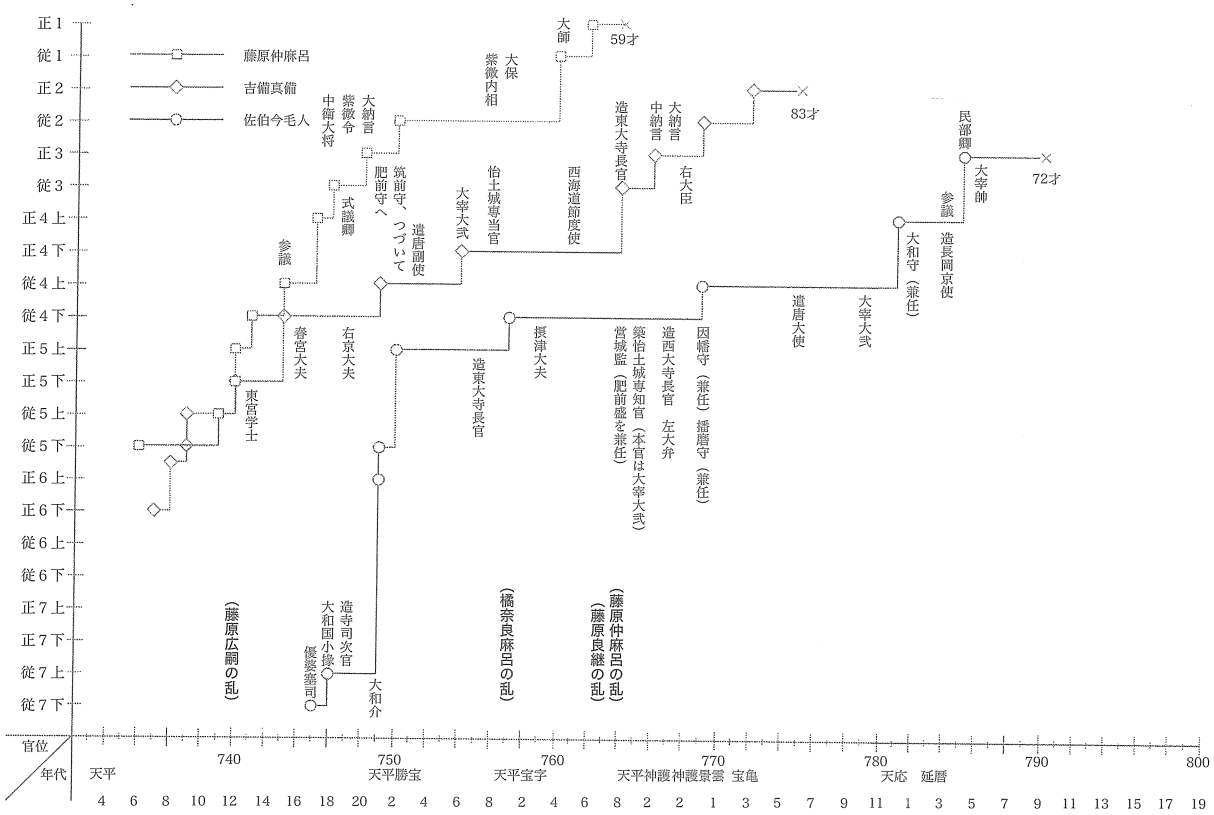

図５　藤原仲麻呂と吉備真備と佐伯今毛人